

## 令和4年度 学内研究助成金 研究報告書

研究種目	<input checked="" type="checkbox"/> 奨励研究助成金	<input type="checkbox"/> 研究成果刊行助成金
	<input type="checkbox"/> 21世紀研究開発奨励金 (共同研究助成金)	<input type="checkbox"/> 国際共同研究推進助成金
	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
研究課題名	大学生低学年のキャリア構築とインターンシップ支援に関する実証研究	
研究者所属・氏名	研究代表者： 経営学部キャリア・マネジメント学科 岩井貴美 共同研究者：	

### 1. 研究目的・内容

本研究では、大学生低学年のキャリア探索に焦点を当てる。インターンシップへ参加することをキャリア探索行動の一つの指標とし、インターンシップ科目を履修した学生と未履修者の学生を比較して、大学生低学年のキャリア探索にどのような差異があるのか検討していく。つぎに、職業決定状態と職業選択の自己決定的な動機、ストレスへの対応力との関係性を明らかにしていく。

### 2. 研究経過及び成果

産学協議会（2022）は、インターンシップのあり方をゼロベースで定着し直すとともに、学生のキャリア形成における産学協働の取組みを4つに類型化し、より詳細な内容が決定された。特に「タイプ2キャリア教育」とは、低学年が対象であり学生が自らのキャリア（職業観・就業観）を考えるのが目的であるとしている。この目標を達成するためには、コロナ禍における低学年はキャリアについてどのように考えているのか、また、コロナ禍などのストレスの影響についてどのような影響があるのか検討していく必要がある。

そこで、本研究は、大学生低学年のキャリア探索に焦点を当てる。インターンシップ参加・不参加を一つの指標とする。まず、インターンシップ科目を履修した学生と未履修者の学生を比較して、大学生低学年のキャリア探索にどのような差異があるのか検討していく。つぎに、職業決定状態、職業選択の自己決定的な動機、ストレスへの対応力との関係性を明らかにしていく。本学の経営学部において、インターンシップ科目を受講している1、2年生、ならびに経営学部の教員に協力を得て、Webアンケート調査を行った。調査実施時期は、2022年7月上旬～8月上旬である。対象者は144名、有効回答数は144、有効回答率は100%であった。分析として、大学生低学年の職業決定の状態、大学生低学年の職業選択の自己決定的な動機、ストレスへの対応力に関して因子分析を用いて検討した。データ分析の結果、インターンシップ科目履修生ほど、「安直」な職業選択状態を避けている結果となった。一方で、「模索」や「混乱」との関連性はみられなかった。また、インターンシップへ参加しようという意思や行動は、自己決定性の高い動機と関連性があることが分かった。さらには、ストレスに対して積極的対処をしている学生ほど職業選択が促進され、自己決定性の高い動機と関連性があることが分かった。

この様に、低学年からインターンシップに参加しようとする学生は、将来の就職活動に不安を抱え、将来設計や職業選択を明確にするのが目的だと考えられる。一方で、低学年であるため、就職活動が身近に感じられておらず、職業決定状態の「模索」の前段階であるかと思われる。キャリア探索を行わなければいけないと感じてはいるが、どのようにすべきかが明らかではない。さらに、ストレスに対して積極的に対処している学生は、将来に向けてやりたいことを内発的に探している反面、外発的に探さなければいけないと感じている状態でもある。大学生活において、親、大学の教職員、キャリアセンターなどから、就職活動に関する情報が共有されることで、キャリア探索が自分ごとと考えられずに周りからの影響が大きいと考える。

### 3. 本研究と関連した今後の研究計画

インターンシップが類型化され、各学年により実施するインターンシップの特徴が明らかになっている。よって、大学生低学年のキャリア構築を促すキャリア教育の一環であるインターンシップは非常に重要である。今後は、大学生のキャリア探索を促すインターンシップのあり方や大学の支援について検討を行う予定である。また、低学年のキャリア構築について更なる研究を行い、低学年と高学年でのキャリア構築の違いやキャリア探索を促す要因を明らかにしていく予定である。

### 4. 成果の発表等

発表機関名	種類(著書・雑誌・口頭)	発表年月日(予定を含む)
日本キャリアデザイン学会	口頭	2023年9月3日